

市民参加型で気候変動対策

人間科学部コミュニケーション学科 3 年 佐藤光咲

カナダ・ランガラカレッジ

1. このテーマを選んだ理由

私が今回の留学で選んだ SDGs のテーマは「市民参加型で気候変動対策」だ。このテーマを選んだ理由は、地球温暖化の進行を自分自身でも強く実感しているからだ。実際、常磐大学の所在地である茨城県水戸市でも年平均気温は年々上昇しており、このままではさらに上昇が続くと予測されている。今回は SDGs13 番の「気候変動に具体的な対策を」をベースに、カナダ・バンクーバーの地球温暖化対策として行っている取り組みについて街を観察したり、現地の人々の声を聴いたりするなどして調査した。

2. 調査

まず、街を観察して気づいたことは、街中に給水スポットが数多く設置されており、多くの市民がマイボトルを持ち歩いていることだ。図書館や、学校、ショッピングモール、さらに街中の歩道にまで、給水スポットが設置されていた。このような環境が整っていることで、ペットボトル飲料を購入する機会が減り、結果としてごみの削減や CO₂排出量の削減につながっていると考えられる。

また、移動手段においても、多くの市民が公共交通機関を利用している印象を受けた。バンクーバーには、1 か月乗り放題になる交通系 IC カードがあり、運行本数も多いため、公共交通機関の利便性が非常に高い。さらに、自転車レーンの整備も進んでいることに加え、バスや電車に自転車を乗せることができる仕組みも整えられており、通勤・通学などでは自転車を利用する人も多い。このように、公共交通機関と自転車を組み合わせた移動が可能な環境は、自家用車から排出される排気ガス削減に大きく貢献していると考えられる。他にも、ゴミの分別や、都市の緑地化などが気候変動対策として観察できた。

そして、ホストファザーに気候変動についてどのように考えているか尋ねたところ、「様々な要因で地球の環境が悪くなっていて問題だと思う。政府が取り組みを行っているが、個人個人の努力が必要だと思う」と回答してくれた。実際、ホストファミリーも徹底したごみの分別や公共交通機関の利用などを行っていた。これらの調査から、バンクーバーでは、誰もが自然と気候変動対策に参加できる仕組みが整っていることが分かった。

3. 見解・考察

調査を通して感じたことは、市民がどれだけ日常的に気候変動対策に関われるかが重要

であるという点である。茨城県では、制度や目標は整備されているものの、それらが市民の日常生活がどの程度結びついているかは課題であると考えられる。一方、バンクーバーでは、公共交通機関の利便性、マイボトル利用の促進などが市民生活に根付いており、環境に配慮した行動が当たり前に受け入れられているように感じた。この点から、茨城県においても、使いやすい制度やインフラを整え、市民が自然と選択することで気候変動対策につながる環境づくりが必要であると考ええる。

4. 茨城県で実現可能な SDGs の取り組み

以上の調査と考察を踏まえ、茨城県で実現可能な取り組みを二点提案する。

一点目は、公共施設や大学、駅、商業施設などを中心とした給水スポットの設置である。これにより、市民がマイボトルを利用しやすい環境を整えることができ、ペットボトルごみ削減と CO₂排出量削減といった効果が期待できる

二点目は、公共交通機関と自転車を組み合わせた移動施策である。自転車利用者向けに雨の日のバスパス制度や、駐輪場の定期券とバス回数券を組み合わせた定期券の導入により、自家用車ではなく、公共交通機関を補助的に利用しやすくする仕組みを提案する。これにより完全に状況に応じて低炭素な移動手段を選択しやすくなると考えられる。

これらの取り組みは、大きな負担を伴わずに市民参加型を促すことができるという点で、茨城県の特性に合った気候変動対策であると考ええる。茨城県においても市民一人ひとりが身近に取り組める仕組みを整え、こうした小さな積み重ねが、茨城県の気候変動対策の促進を目指していきたい。